

「利用教育」の射程を考える： 京都大学での実践をもとに

第17回図書館利用教育実践セミナー in 京都
(2012年3月10日 キャンパスプラザ京都)

京都大学附属図書館研究開発室
准教授 古賀 崇

tkoga@kulib.kyoto-u.ac.jp

http://researchmap.jp/T_Koga_Govinfo/

1

本日の内容

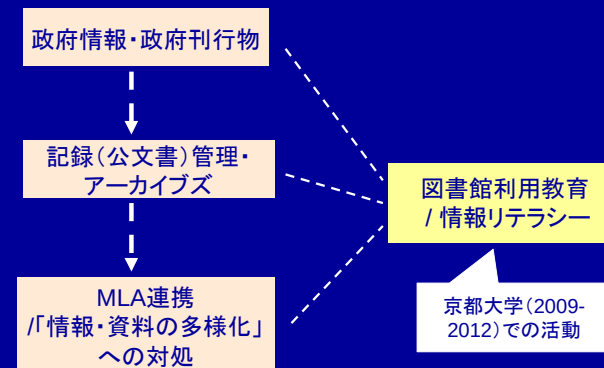
- 前提的な話
- 京大「ポケット・ゼミ」での試み
- 図書館利用教育ガイドライン(大学図書館版)改訂などに対する提言

2

前提的な話

3

古賀自身の研究・教育領域



4

京都大学附属図書館研究開発室として

- 「情報リテラシー教育・講習研究会」(2009年度～)
 - 現在、学内教員(古賀含め4名)と学内図書館・室(附属図書館と各部局(研究科・学部等)図書館・室)の担当で構成
 - 教員・職員の協働による研究開発の場
- 全学共通科目「情報探索入門」(1998年度～)
(<http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp> → 「情報探索入門」)
 - 分類／目録／参考資料(辞典類等)の活用／データベース・インターネットの活用／総合演習
 - 新しいアプローチはないか？

5

情報源・情報の「構造」を読み解く： 京大「ポケット・ゼミ」での試み

6

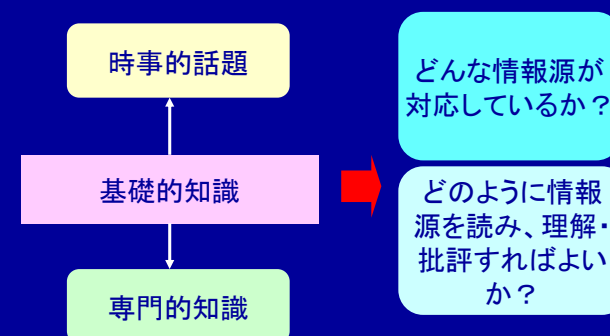
京大・平成23年度前期ポケット・ゼミ 「情報源を読み解く」(古賀担当)

- ポケット・ゼミ＝「全学共通科目 新入生向け 少人数セミナー」
- ねらい: 各種情報(源)の「構造」や、読み方・活用法を理解する
 - 種類ごとの特徴
 - 「時間の流れ」
 - 研究過程とのかかわり

など

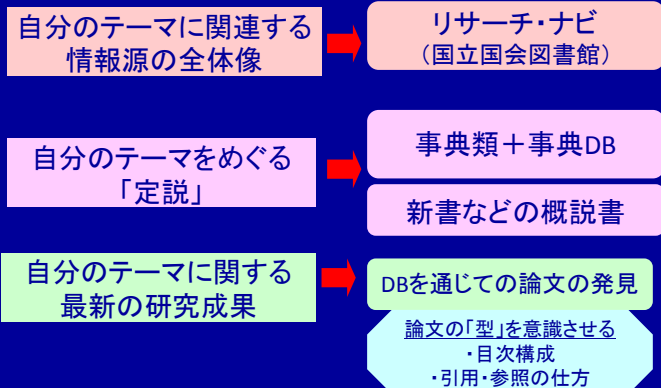
7

情報源の「構造」の大枠



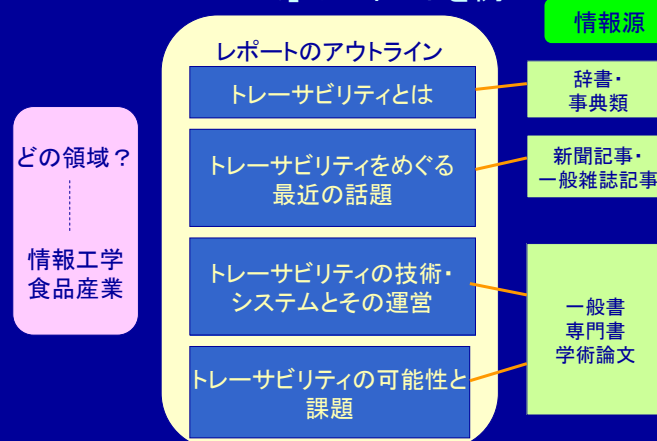
8

ポケゼミの大まかな流れ



9

到達目標:「食材のトレーサビリティをめぐる現状
について」のレポートを例に



10

「利用教育」の射程を考える:
図書館利用教育ガイドライン(大学
図書館版)改訂などに対する提言

11

「図書館利用教育の目的・目標」の 5領域をめぐって

- ・領域1 印象づけ
- ・領域2 サービス案内
- ・領域3 情報探索法指導
- ・領域4 情報整理法指導
- ・領域5 情報表現法指導

- ・ポケット・ゼミは領域3～5につながる?
- ・領域4・5は図書館単独でどこまでやれるか?
→「パートナーシップ」(後述)を活かすべし
– 参考事例: 大阪大学附属図書館での取り組み(昨年の図書館利用教育実践セミナーin京都で紹介)

12

利用教育のための運営体制・ パートナーシップ

- 「パートナーシップ構築」の重要性
 - 『図書館利用教育ハンドブック:大学図書館版』(2003)第Ⅲ部 準備編・2章で記述
 - 「キーパーソンへのアプローチ」:現在ならFD担当部局が重要な対象か
 - 同上『ハンドブック』まえがきより:「図書館内部の断片的活動」という点はどれだけ克服できたか?
- 「パートナーシップ構築」「大学での理解・位置づけ」の各段階を、ガイドラインに組み込めないか
 - 自己チェック、外部チェックのために

13

「図書館」を超えたところでの 利用教育・情報活用能力に向けて

- 「図書館蔵書の価値の相対化が生じている」(竹内比呂也・千葉大附属図書館長曰く)
 - (私見)電子書籍に限らず、「情報・資料の多様化」が背景
- 「パッケージ化されていないデータ(Open Government)」、文書、映像などにどう対処するか
 - “情報(源)の「構造」の把握と、価値・信頼性の評価”、それを踏まえた「整理」「表現」の必要性はいっそう増す

“調べ、評価して、伝える”

14

一例として...

- 赤井伸郎・大阪大学教授曰く
“行政・自治体にとって自らの活動や財政に関する記録やデータの整備や公開が求められる一方、研究者としても「どのデータを分析対象とすればよいか」を見抜く必要がある”
 - 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会(全史料協)近畿部会第111回例会(2011年6月3日、福井県文書館)講演「記録の精査でここまでわかる—アーカイブズとガバナンス—」より
 - 参照:『Network』(全史料協近畿部会会報)45号、2011年10月(赤井教授のまとめ、古賀の参加記)

15